インテリアに使用する配色の印象評価
Psychological evaluation of the interior color scheme

横井 榎
Azusa Yokoi

齋藤 美穂
Miho Saito

佐藤奈津子
Natsuko Sato

北村 和男
Kazu Kitamura

大原千佳子
Chikako Ohara

3.2.対象者
10代から30代の男女102名（男性51名、女性51名、平均年齢22.7歳）。

3.3.手続き
上記①②③の3刺激を同時呈示し、各10配色に対してSD法による段階印象評定を行わせた。使用した形容詞列をTable2に示す。なお、印象評価は主に建具を中心に拡大した部分画像（上述刺激①）を中心に用いるよう被験者に教示を行った。

Table2 使用した形容詞列

<table>
<thead>
<tr>
<th>評価値</th>
<th>形容詞列</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>上下の判断</td>
<td>重い-軽い</td>
</tr>
<tr>
<td>時間的感</td>
<td>長い-短い</td>
</tr>
<tr>
<td>感覚</td>
<td>効果的-効果的</td>
</tr>
<tr>
<td>美</td>
<td>美しい-醜い</td>
</tr>
<tr>
<td>買いやすさ</td>
<td>価値の高い-価値の低い</td>
</tr>
<tr>
<td>冷れ</td>
<td>冷たい-暖かい</td>
</tr>
<tr>
<td>空間的関係</td>
<td>重い-軽い</td>
</tr>
</tbody>
</table>

3.4.分析
SD法による印象評価より得られた評価値に対してクラスタ分析を行い、インテリア配色に関する印象評価における10配色刺激の分析を試みた。また評価値に対して因子分析を行い、インテリア配色に関するイメージ構造を明らかにした。

4.結果と考察
4.1.イメージプロフィール
SD法により得られた評価値のイメージプロフィールをFigure1に示す。「平らな・個性的」の項目において、黒・黒・黒・黒・白の4刺激の評価値が低い結果であった。また「暖かい-冷たい」の項目に関しては、黒・黒・黒・白と、黒・黒・白の4刺激の評価値が低い結果であった。このことから、白・黒を使用した配色の部屋は個性的で冷たい印象であることがある。

さらに、「男性的な・女性的な」の項目において、茶2×茶2、黒×黒、白×白、白×黒の4刺激の評価値が高い結果であり、茶2×茶2、白×白の2刺激は低い結果であった。茶2×茶2などの中程度の明度の低い色を使用したインテリア配色は男性的な印象であり、逆に茶2×茶2などの明度の高い色を使用した配色は女性的な印象であることがわかる。

「明るい-暗い」の項目においては、白×白、薄茶1×茶2、薄茶2×薄茶2、茶2×茶2の4刺激の評価値が低い結果があり、茶2×茶2、
黑×黒の2刺激は低い結果であった。薄茶や白などの明度が高い色を使用したインテリア配色は明るい印象であり、黒や濃茶などの低い色を使用したインテリア配色は暗い印象であることがわかる。

評価因子と力量因子の因子得点散布図をFigure 2に示す。得られた評価因子と力量因子の因子得点をクラスター分析の結果より得られた4クラスターに関連付けて検討した。薄茶1×薄茶1、白×白からなる【WHITE】系は評価因子の因子得点が非常に高い。濃茶1×濃茶2、白×黒からなる【FLOOR DARK】系は力量因子の因子得点が高いが、評価因子の因子得点は低いか特徴的である。薄茶2×薄茶2、濃茶1×濃茶1、濃茶1×薄茶2からなる【BROWN】系に関しては、原点付近に集中している。以上のことから、明度が高い色を使用した配色ほど評価因子の因子得点が低くなることが示唆された。

Figure 1 各インテリア配色のイメージプロフィール
4.2.クラスター分析
10 剛刺激に対する印象評定から得られた評定値に対して、階層クラスター分析（平均ユークリッド距離グループ間距離統合法）を行った結果、薄茶2×薄茶2、薄茶1×濃茶1、濃茶1×薄茶2の3刺激からなるクラスター1、薄茶1×薄茶1、白×白の2刺激からなるクラスター2、濃茶1×濃茶2、白×黒の2刺激からなるクラスター3、濃茶2×濃茶2、黒×黒、黒×白の3刺激からなるクラスター4の4クラスターに分類された。薄茶1×薄茶1は他の茶系の刺激と同等ではなく、白×白と近似した評価であることがわかる。また濃茶2×濃茶2も同様に、茶系の刺激と同等ではなく、黒×黒と近似した印象として評価されていた。また、茶色配色であるものの中で、床が薄茶と比べて明度の低い濃茶1×濃茶2や白×黒の配色が同等の印象として評価された結果、クラスターが形成されると考えられる。得られた各クラスターを薄茶2×薄茶2、濃茶1×濃茶1、濃茶1×薄茶2からなる【BROWN】系、薄茶1×薄茶1、白×白からなる【WHITE】系、濃茶1×濃茶2、白×黒からなる【FLOOR DARK】系、濃茶2×濃茶2、黒×黒、黒×白からなる【BLACK】系と命名した。
4.3.因子分析
10 剛刺激に対する印象評定から得られた評定値に対して因子分析（主因子法、バリックス回転法）を行った結果、3因子を抽出し、各因子に評価因子、力量因子、親和性因子を分類した。因子負荷量表をTable 3に示す。3因子の累積寄与率は60.7%であり、第一因子である評価因子の寄与率はその半分以上を占めていた。

Table 3 因子負荷量表（バリックス回転後）
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>FLOOR LIGHT</th>
<th>FLOOR DARK</th>
<th>BROWN</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>薄茶1×薄茶1</td>
<td>0.249</td>
<td>-0.103</td>
<td>0.404</td>
</tr>
<tr>
<td>薄茶1×濃茶1</td>
<td>0.247</td>
<td>-0.100</td>
<td>0.406</td>
</tr>
<tr>
<td>薄茶1×薄茶2</td>
<td>0.242</td>
<td>-0.098</td>
<td>0.400</td>
</tr>
<tr>
<td>濃茶1×薄茶1</td>
<td>-0.249</td>
<td>0.103</td>
<td>-0.404</td>
</tr>
<tr>
<td>濃茶1×濃茶1</td>
<td>-0.247</td>
<td>0.100</td>
<td>-0.406</td>
</tr>
<tr>
<td>濃茶1×薄茶2</td>
<td>-0.242</td>
<td>0.098</td>
<td>-0.400</td>
</tr>
<tr>
<td>白×白</td>
<td>0.295</td>
<td>0.136</td>
<td>0.309</td>
</tr>
<tr>
<td>白×黒</td>
<td>0.300</td>
<td>0.099</td>
<td>0.232</td>
</tr>
<tr>
<td>白×黒</td>
<td>0.305</td>
<td>0.096</td>
<td>0.233</td>
</tr>
<tr>
<td>白×白</td>
<td>0.404</td>
<td>-0.103</td>
<td>0.249</td>
</tr>
</tbody>
</table>

Figure 2 評価因子×力量因子の因子得点散布図
5.まとめ
以上の結果から、茶系のインテリア配色は特徴的な印象はなく、建具が床の色を黒や黒を伴なうインテリア配色は個性的な印象や冷たい印象といった特徴的な印象が持たれることが分かった。これは、茶系のインテリア配色が実際のインテリアの配色設計においては非常に使用されていることによる見慣れた要因が影響を及ぼしていると考えられる。また茶の明度の低い色を使用した配色は男性的な印象を持たし、白のような明度の高い色を使用した配色は女性的な印象を持たすこともありえた。さらに、建具と床が同一色の場合には、使用される色の明度の高低が印象評価に影響を与えることが示唆された。また建具と床が二色配色の場合には、色の明度が床の明度よりも高い組み合わせの二色配色とその逆である建具の明度が床の明度よりも低い組み合わせの二色配色について印象評価が異なる結果となっても示唆された。
以上の結果を踏まえ、インテリアの配色設計において実用的な配色の印象評価を行うために、今後はさらに多くの内装色の組み合わせについて評価を行い、検討を行う必要がある。
参考文献
日原あゆ子・児玉晃・松井英明 インテリア・カラーディネーションシステムにおけるインテリア配色モデルの研究 美術研究 Vol.36(1) 2-15 1999
小木倉隆・乾正雄 Semantic Differential（意味微分）法による建物の色彩効果の測定 日本建築学会論文報告集 第67号 105-113 1961

NII-Electronic Library Service